

論 文 要 旨

Weight loss in the early stage of progressive supranuclear palsy
(発症早期の進行性核上性麻痺における体重減少の検討)

関西医科大学神経内科学講座
(指導：日下 博文教授)

柘植 彩子

【はじめに】

神経変性疾患患者では体重減少がしばしば観察されるが、体重減少が疾患そのものによるのか、食事量の減少やうつ、嚥下障害、消化管機能障害、薬剤の副作用など二次的に起こっているのか一定の見解は得られていない。パーキンソン病（Parkinson's disease : PD）と進行性核上性麻痺（progressive supranuclear palsy : PSP）の患者の Body Mass Index（BMI）を比較した研究は過去に報告されているが、進行期で明らかな嚥下障害を有する時期の調査である。今回我々は嚥下障害のない発症早期に着目して PD と PSP の経時的な体重変化を評価し体重減少について比較検討しえたので報告する。

【研究方法】

当科通院中の PD、PSP 患者を対象とした。各疾患の臨床診断はそれぞれの確立した診断基準に基づいて行った。姿勢異常や骨粗鬆症により身長が変化する可能性があることから経時的な変化は BMI ではなく体重で評価した。初回の測定は発症から 3 年以内、2 回目の測定は初回の測定から 3 年以内とした。全ての患者は 2 回目の体重測定時にも支持なく立位保持が可能で、体重増減に影響しうる自覚的な嚥下障害、胃瘻造設、内分泌疾患、悪性腫瘍、骨折、整形外科的疾患の手術歴を有する患者、SSRI や SNRI などの抗うつ薬を服用している患者は除外した。対象患者の性別、発症年齢、初発症状、初診時の年齢、服用歴は過去の診療録より抽出した。薬剂量は LED（Levodopa equivalent dose）に換算した。初回と 2 回目の体重を各々 BW_1 (kg)、 BW_2 、初回の BMI を BMI_1 (kg/m^2) とした。経時的な体重変化を ΔBW とし、 $\Delta BW = BW_2 - BW_1$ とした。以上の条件のもとに BMI_1 について疾患群間の比較と PD、PSP の経時的な体重変化の有意差検定を行った。

【結果】

発症から BMI_1 までの罹病期間は PD は 1.4 ± 0.8 年、PSP は 1.7 ± 1.0 年、 BMI_1 は PD は 22.3 ± 3.4 kg/m^2 、PSP は 23.2 ± 3.2 kg/m^2 であり、罹病期間や BMI_1 について疾患群間の有意差はなかった。 BW_1 と BW_2 の測定間隔は PD は 1.8 ± 0.8 年、PSP は 1.7 ± 1.0 年で有意差はなかった。 ΔBW は PD は -0.5 ± 3.0 kg で有意な体重変化は認めないが、PSP は -7.3 ± 6.5 kg で、有意に体重減少を認めた。

【考察】

体重変化はエネルギー摂取と消費のバランスの結果と考えられるが、特に嚥下障害はエネルギー摂取に著明な影響を与える。本研究では発症早期に着目し、嚥下障害を有する患者は事前に対象から除外しているにも関わらず PSP 患者の経時的な体重は有意に減少したことが注目すべき点である。また、 BW_2 の時点では PD 患者の多くは投薬が開始され、dopaminergic な治療が振戦や筋強剛といったエネルギー消費の要因を改善し、PD 患者の体重を維持する方向に関与した

可能性は否定できない。投薬による食欲の改善の可能性もある。しかし、PSPはBW₂の時点で薬剤治療は行っておらず体重変化への薬剤の関与は否定的である。そのためPDとPSP患者の発症早期におけるエネルギー消費の機序は異なっている可能性が示唆され、PSP患者ではエネルギー消費が促進されていることが予測された。PSP患者の経時的な体重減少の原因についての解明は困難ではあるが、代謝調節を行う視床下部の神経ペプチド、体脂肪量の調節を行うレプチンなどが疾患特異的に視床下部で神経病理学的な変化を認めていないかの検討が今後必要である。